

圏外のアンテナ

[神楽坂まつり]の巻

夕方、仕事の移動で飛び乗ったタクシーの冷房が、効きすぎている。運転手さんと軽口を交わしながら窓を開けていると、想定外のお囃子が聞こえてきた。

素通りできない何かを感じて、思わずタクシーを降りてしまう。

数分歩くと、そこはサウナか熱帯植物園のような人いきれである。

首に手ぬぐいを巻いた日本びいきの旅行客が、まっ赤な顔から湯気を立てて、日本の猛暑に耐えている。

浴衣姿の若いお母さんたちは、片手でベビーカーを押し、反対の手に持ったうちわで、バタバタとベビーをあおいでいる。

老若男女が、押し合いへし合いしながら、坂道を歩いていく。

そのとき、ホオズキや軽食の屋台のなかに、ライオンズクラブの看板が見えた。緑の「福島」の二文字が目飛び込んできて、不意を突かれた感じになった。

それは復興支援のテントで、福島産の樽酒が、一杯いくらかで飛ぶように売られている。

数軒先にも、「ひとつになって 浜・中・会津 女性パワー」という垂れ幕を掲げた福島の商工会議所のテントがあり、しっかり行列ができています。

一瞬、こみあげるものがある。故郷への愛と後ろめたさが、心のなかで交錯する。

「さあ、テントの方へどうぞ！」とでもいう風に手を動かし、思わず無言の呼び込みを始めている自分…。

そのしぐさの幼稚さに気がついて、わたしは少し、ハッとしました。

=2012年8月2日掲載=



都内で遭遇した夏まつり